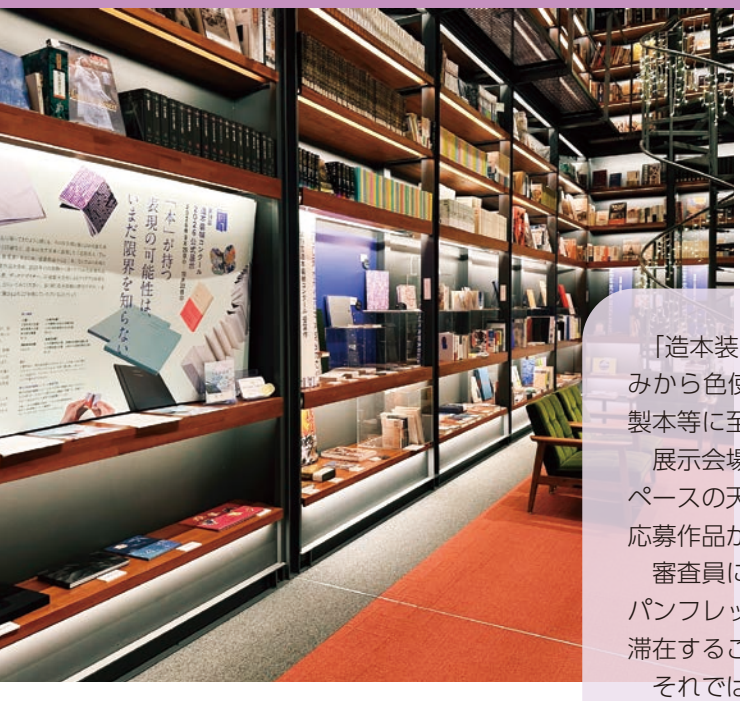
NEWS LETTER
No.163
2026.Nov

遊文通信

今回の『遊文通信』は…
- 「造本装幀コンクール 公式展示」に行ってきました

「造本装幀コンクール 公式展示」に行ってきました



遊文舎では、先月号でご紹介した『1970年大阪万博 パビリオン巡礼の旅』をはじめ、学術書など制作から印刷、製本まで一貫して本造りをしています。
そんな本の“顔”である装幀のトレンドや製本技術に触れるべく「第59回造本装幀コンクール2026 公式展示」に行ってきました。

「造本装幀コンクール」では 1 年間に発行された書籍を対象に、本文の文字組みから色使い、レイアウト、表紙カバーの美しさや機能性、材料の適性、印刷、製本等に至るまであらゆる角度から審査し優れた作品を決定します。

展示会場は“本の街”東京は神保町にある出版クラブビルです。ライブラリスペースの天井まで続く本棚は何度見ても圧巻！こちらには受賞作品だけでなく全応募作品が並べられ、自由に手に取って見ることができます。

審査員による講評や装幀仕様も読みながら見たい…ということで、まずは公式パンフレットを購入。これを読みながらじっくりと楽しんだ結果、2 時間以上も滞在することになりました。

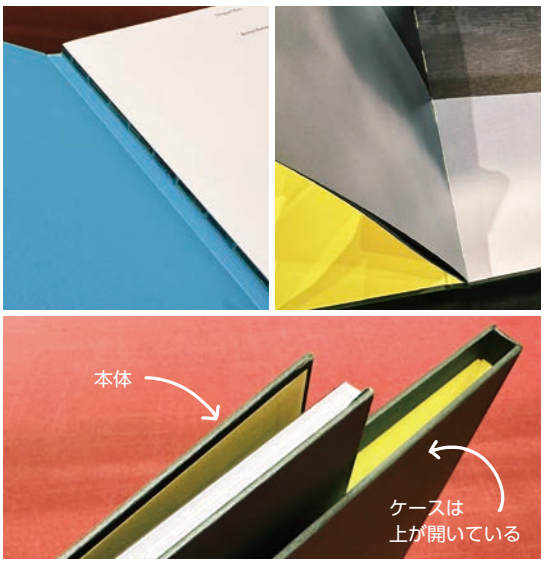
それでは、その中から特に印象に残った作品をご紹介します。

掲載写真は「造本装幀コンクール 公式展示」会場で遊文舎カメラマンが撮影したものです



(公式 HP より)

出 版 社：COO BOOKS
装 幀 者：宮添浩司
印刷会社：㈱ライブアートブックス
製本会社：㈱博勝堂



『Dropped Water, Dropped Fruit』 公文 健太郎（著）

2 冊組の写真集。事前に公式 HP で見てイメージしていたものよりも遥かに大きく、見開きでレイアウトされた美しい写真が視界の端から端まで飛び込んでくるようでした。

表紙は「スイス装」という本文を表 3 部分のみで貼り付ける製本方法で、本体とサイズ違いのケースに収めるというもの。

表紙の上品な色味に対して、蛍光色の見返しとそれに色を合わせたかがり糸が目を引き、開いた瞬間にハッとさせられます。よく見るとケースの内側にも見返しと同じ蛍光色が使われていました。

株式会社 遊文舎
［大阪本社］〒532-0012　大阪市淀川区木川東 4 丁目 17-31
TEL：06-6304-9325（代）　FAX：06-6304-4995
［東京支店］〒101-0052　東京都千代田区神田小川町 1 丁目 10-2　VORT 神田小川町Ⅱ 4F
TEL：03-5357-1420　FAX：03-5357-1421
［京都支店］〒601-8106　京都府京都市南区上鳥羽北中ノ坪町 2 番地
TEL：075-681-7748（代）　FAX：075-672-5602
https://www.yubun.co.jp/
E-mail：info@yubun.co.jp

『石垣りんの手帳 1957 から 1998 年の日記』 織田 桂（取材・文・編集）

詩人・石垣りんの 41 年間の日記が本人の書いた手帳そのままを写真でおさめられています。角丸の表紙やサイズ感、手に触れた時の質感が手帳そのもののようで、本の内容を形にしているという点で特に優れていると感じました。

人の日記をのぞいているような、その書き文字を見ているうちに親しい人のように思えてくるような…。時折挟み込まれた写真もかわいいです。





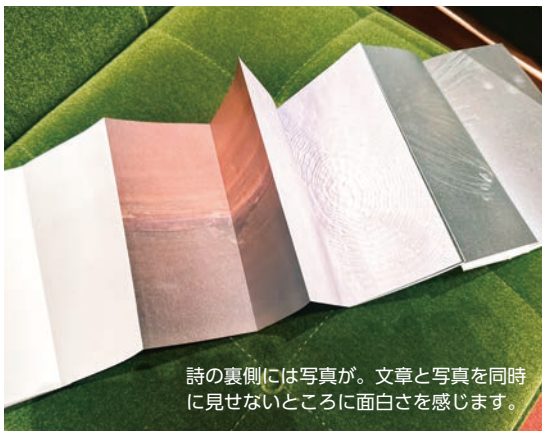
出 版 社：katsura books
装 幀 者：櫻井 久、中川あゆみ
印刷会社：㈱東京印書館
製本会社：㈱東京印書館



本体が少し
めくれてきている



出 版 社：今宿未悠
装 幀 者：今宿未悠、曽根 翼
印刷会社：㈱イニュニック
製本会社：㈱博勝堂



詩の裏側には写真が。文章と写真を同時に見せないところに面白さを感じます。

ノンブル（ページ番号）だけの空白ページが続きます。
天側ぎりぎりのシビアなマージン…！

『詩集 雲ノ平』 今宿 未悠（制作）

長い蛇腹折りの本体を幅の狭い表紙で覆う。そのためか展示されている作品は少し折れ曲がっていました。けれど、それもまたこの詩が制作された北アルプスの溶岩台地の過酷な環境を表現しているようにも見えます。

この本は組版も特徴的でした。天と左右が極端に詰められているのに対して地側は大きく余白が取られ、自然界での緊張感とともに平原の広さを表現しているようにも感じられます。

詩の合間にノンブルだけが 2、3、4 と続く空白ページからは時間が生まれ、本なのに映像を見ているような不思議な体験でした。

まだまだ他にも素晴らしい作品がありましたが、スペースがないのでこのへんで…。

今回の展示を見て、改めて感じたのが装幀＝本の佇まいが読む者に与える影響の大きさです。世界観や体験そのものを生み出す役割としては、もしかしたらその中身と同等か、ときにはそれよりも大きいこともあるのかもしれません。

書籍もデジタルで読むことが多くなった今、あえて本を造り、それを手に取ることの意味や可能性を感じました。

実際に見て触れて感じたことを活かして、これからもより一層良いご提案ができるよう取り組んでまいります。

（制作課　下山ゆう）

■編集後記

今号で紹介した造本装幀コンクールの記事を読んで、私自身もふと立ち寄った本屋で、思わず手に取りたくなる本に出会うことがあるなと思い浮かべました。さまざまなもののデジタル化が進む今だからこそ、紙の本ならではの魅力を、これからもしっかりと発信していきたいと改めて感じました。（すずき）

■今月の紙

淡クリームキンマリ　A 判 43.5kg

●用紙の特徴

淡いクリーム色が特徴の、書籍本文に適した上質紙です。さらりとした手触りで目にやさしい色合いのため、長時間の読書にも適しています。落ち着いた風合いと温かみのある仕上がりで、小説やエッセイ、自分史など、文字を中心とした冊子におすすめです。